

学長室だより

2018.9.5 NO.11

起業家の資質とは（夢実現へ 成長させ続ける力）

バスケットボールBリーグの秋田ノーザンハピネッツが、新シーズンから1部（B1）で戦う。国際教養大学の卒業第1期生でもあるハピネッツの水野勇気社長に、私も祝電を送った。

水野さんは35歳の青年社長だ。ここ数年の活躍をみていると、事業を起こす人材、すなわち「起業家の典型」と見ることができる。水野さんは少年時代から起業することに関心があったそうだ。それが現実味を帯び出したのはオーストラリアのグリフィス大学に留学し、スポーツマネジメントの科目を受講してからだという。

起業家とは、英語で entrepreneur、つまり「業を起こす人」のことだ。夢想家の意味もあるが、もともとは、実際には存在しないことを強く思い念じ、その実現を思い描く能力のある人を意味する。

ここで企業の成長について「生き物」になぞらえて説明してみよう。夢の実現に向け、実際に一步を踏み出して「業」を起こすと、産声を上げたこの「赤ん坊」の企業はまずはすぐにミルクを欲しがらる。

この時期の起業家の心境は、あたかも子育てを始めた新米お母さんのようだ。ミルクを数時間おきと与え、おむつを取り換え、添い寝をし、くしゃみ一つにも赤ちゃんの体調を気遣う。

それでは、この赤ん坊の企業にミルクを飲ませるといことはどういう意味なのか。それはいわゆる日銭（毎日の売り上げ）を工面するということだ。

多くの起業家の場合、このミルク代（日銭）を工面することできゅうきゅうとし、現状を維持し、零細企業にとどまる。この初期の段階から抜け出し、それ以降急成長を遂げていくことができるのは1%にも満たない。

もしも全起業数の1%だったとしても、この赤ん坊段階を生き延びて成長し、巨大企業化すると、その社会は巨大企業の数が多すぎて過剰になり、競争過多で不安定になるという。それほど業を起こすということは、社会生態的な制約があるのだ。

さて、幸いにして1%の危険水域を脱した赤ん坊企業は順調に成長を続ける。そうなれば安泰なのだが、そう簡単にはいかない。なぜならば、事業が拡大して何億円もの資金が必要になった場合には、起業家個人では融通出来ないからだ。

そこで次にとられる手段は、株券を発行してそれを一般大衆に売り、その株式販売で得た資金を会社の事業費に充てることだ。その代わりに、株券を購入した一般大衆たちが株主になり、その企業の持ち主になる。

このようにして企業は社会化され、社会的存在としての位置を確定する。企業は、このような幾多の波を乗り越えて成長する。プロバスケットを通じて、秋田の人々に夢と楽しみを提供し続ける水野社長には、今後もぜひ頑張って欲しい。



鈴木 典比古

注) 朝日新聞秋田版「あきたを語ろう」からの転載です。以下 URL からご覧いただけます
<http://www.asahi.com/area/akita/articles/MTW20180905051550001.html>

President Norihiko Suzuki, DBA